

文化

新

▼ユウガオの花
わが家の小さな庭に、よいし
初めてユウガオの花が咲いた。
六月に守定市近鉄桜原駅に近
い苗で、買って帰って種を蒔
（まいて）みたら、八月も中頃
にはいつやつと咲き始めた。名
前といね夕方おやじ、一つ二つ
たり毎日数を増やしつつ、あ
たつにうるさいを放ちながら百
八十本咲花を開く。

筆者の先生だった森口武男
に、そんなユウガオを詠んだ句
がある。

「夕顔の十（じよ）ひらきたる
あふみやむ」

（夕顔は夢あめまいといふ黒雲の
遺句集のつづり下説）。

朝刊を取りに出るば、花は
あひしがぞじまつてぶ。

牧野富太郎が校訂した『植物

図鑑』（北隆館）には、「ゆう

がほ・夏目大形花を開く。白色

を有し、花冠は深く五裂す」と

あり、千瓢（かひょう）は

この肉を薄く削（そ）いで乾

かしたもので、下野（いまと）柄

木（くのき）の名産としている。

また、『日本山海名物図会

（文政四年・一七五四）は、撰

州木津千瓢（くのきちくびょう）を載せて、

「むかしは大坂三津、高麗よ

りおおく千瓢を出す。里人これ

を作り美のりたる時取て輪切り

にして、皮を去て細くむきあげ半
にかけ田にまづ。其曰多く
雪のいん）。木津はかひょう
（木子也）と記している。

▼かんびょうの产地
話は、ユウガオの優雅で白く
美しい花が、どうも千瓢の方
へ向ってしまいそうで、それは
お計りいたくとして、先

述けたい。

農家だった母の里に行へ祖

父地、柄木が千瓢の特産地とし
て名高かつたことがうかがえ

るユウガオの「わた」と果実を
煮付やおひげの実にする

わが大和でいえば、まず「奈
とあつて」他にも五目飯、いな

は吸物に焼か鰯、かんひや
（第義）、かんかん・野菜

の炊き合せ）に「大竹の子、
丸なすび、かんひやう大梅」

は、夏の日嘗食と「かんひ
のななほ」（ほほ）を炊くとの
例が見える。

民俗通信

291 西村 博美

ユウガオの話

前掲の『植物図鑑』の記事か
ら想起しうことがある。前回の

本稿（290回、10月4日付）

で宇都宮三荒山神社の音を
務めた森口奈良吉に触れたが、
氏の日誌に、「10（昭和）

7・18夜、武男（奈良吉・長
良瀬）ひじり鳴るだらうか。

（遺句集のつづり下説）。

朝刊を取り出るば、花は
あひしがぞじまつてぶ。

牧野富太郎が校訂した『植物

図鑑』（北隆館）には、「ゆう

がほ・夏目大形花を開く。白色

を有し、花冠は深く五裂す」と

あり、千瓢（かひょう）は

この肉を薄く削（そ）いで乾

かしたもので、下野（いまと）柄

木（くのき）の名産としている。

また、『日本山海名物図会

（文政四年・一七五四）は、撰

州木津千瓢（くのきちくびょう）を載せて、

「むかしは大坂三津、高麗よ

りおおく千瓢を出す。里人これ

を作り美のりたる時取て輪切り

をくりました。

（参考）『植物図鑑』（岩波書

店などを見

ると、「節の木曾千瓢、能州福野、上総佐

用集」（伊京本明応五年）

に、冬瓜（ひょうたん）・白菜な
どに統けて「千瓢、和名タソカ

レ草、夕顔」を掲げ、信州福島

か。

思い出す千瓢の風景

源・献立

本料理事物起用集（伊京本明応五年）

に、「節の木曾千瓢、能州福野、上総佐

用集」（伊京本明応五年）

に、「節の木曾千瓢、能州福野、上総佐



夕方おそく咲く、白くて大きなユウガオの花

興福寺の僧・

成（第三巻 聖川書店）。

また、大和・

良民俗文化研究所研究員

美しい咲いたユウガオの花